

「日本語中級・後」における作文指導のあり方

梅岡 巳香

要旨

一橋大学の日本語基礎科目の一つである「中級・後」のクラスで学ぶ留学生たちは、自分の意図することを十分に日本語で伝えられるレベルである。しかし、文章で表現させてみると、漢字や文法、自分の意見をまとめて述べたり、文章を構成していく力が不十分であるということが、1998年度の授業でみられた。

まとまった文を書くことについて、ただ書かせるだけにとどまらず、教師が課題を慎重に選び、書かせる内容を具体的に指示するなどした上で、個人的に指導する時間をとることを提案する。

キーワード 「日本語中級・後」、作文指導、誤用、個別指導

1. 「日本語中級・後」一クラスの概要と問題点

一橋大学で留学生*1が学ぶ日本語には、基本科目と日本語選択科目がある。

基本科目とは、「日本語中級・前」「中級・中」「中級・後」「上級・前」「上級・後」の五つで、学生は夏・冬学期それぞれの学期の開始直後に行われるプレースメントテストにより、履修する基本科目が決められる。

筆者が担当する「中級・後」は基本科目のひとつで、このクラスには研究生（漢字圏など国は様々）や、一橋大学と交流協定校となっている欧米豪州からの留学生などがある。アジア系の学生など日本での滞在が短い学生は、日常的な語彙や聴解、会話力が不足しているのに比べ、欧米や豪州からの学生は過去にホームステイを経験している者もあり、日常会話は流暢であるが、文法、語彙などはやはり正確に学ぶ必要がまだまだあるという学生が多い。学生をみても、また、このクラスが基礎科目である点から考えても、四技能をまんべんなくレベルアップする必要がある。

テキストは、筆者が担当するようになった1997年度から『文化中級日本語Ⅱ』*2を主教材として用いている。

ゼメスター制を採用しているため、このクラスは一年にふた学期、すなわち2回開講されるのだが、1997年度は、夏・冬学期ともこの教材だけを授業で用いてみた。しかし、このテキストにある読解、聴解などのいくつかは、受講学生のレベルよりやさしいようで、学習意欲をかりたてるにはもうひとつ上のレベルのものを準備する必要があると感じられた。学生は、それぞれの国で専門科目を学んでいること、また一橋大学でも専門科目のゼ

*1 後掲の年報参照

*2 『文化中級日本語Ⅱ』（文化外国語専門学校日本語課程 1997年）

ミに出席していることから、そのレベルにふさわしい日本語力、すなわち新聞、ニュースなどが読める能力をつけることを希望している。

そこで 1998 年度は、文法などテキストを部分的に授業でとりあげ、それ以外は宿題とし、読解、聴解、作文はテキストを離れることにした。また、週の半ばに 90 分授業が午後にニコマ続き、教師学生ともに集中力に限界が見られること、授業では四技能を高めるという方針があることから、三時限目にテキスト中心の学習（文法、漢字クイズによる語彙の学習）、四時限目に自主作成の聴解と会話教材というように、より多くの内容を盛り込んでみた。

このような授業はおおむね好評であったが、この際に問題となったのは、学生が 15 名近くいる中でどのように会話を行うかということであった。そこで夏学期は、会話の題材を設定し、それに関する自分の意見をまとめて書かせるという作文の宿題を前の週に出した。そして授業当日に提出させ、学生を数名のグループにわけて会話をするという形をとった。これは学生に発話の機会を多く与えるという点ではよかったようである。しかし、教師がそれぞれのグループを回って日本語を直していくには限界があるという反省から、冬学期ではグループ会話をやめ、数名が意見を出し、それに対して残りの学生が意見をさらに出し合うという形をとった。このようにすると、教師が適切な表現、誤りを指摘でき、学生全員がそれを学びとれるのでよいという声が多かった。

確かに発話という点に関しては、その人数の割に話す機会を多く与えられたのではないかとは思える。しかし、その発話を促す元となる学生の作文を見ると、作文の指導のあり方について再度検討し直すべきだと感じられた。

中級も後半となると、自分の意見をまとめて言えるレベルである。交流学生が多いこのクラスでは、彼らの過去の日本語学習歴は、1年から3、4年間程度で、特に豪州の学生は過去にホームステイを経験しているため流暢に話すことができる。ところが、発話能力に比べ、文章力はいま一歩とを感じるものがある。日本語の学習を話すことから始めた学生の場合は特に、話し言葉が随所に見られる。

一方、日本の滞在歴が短い漢字系の学生などは、発話は豪州、欧米の学生ほど流暢ではないためか、話し言葉が文中に現れることはあまりない。しかし、彼らもまた母国語からの翻訳ではないかと思われる文を書いてくることは否定できない。

話し言葉や、不適切な語彙の使用などについては、細かい指摘をする時間をこまめにとれば直っていくことと思う。しかし、両者に共通して言えることは、作文の基本的な部分、すなわち文法、漢字に始まって、自分の意見を明確にし、それをまとめるというような点を、上級に進む前のこの「中級・後」でしっかり学ぶ必要があるということである。

週にニコマしかないこのクラスでは限界があるものの、中級までで学ぶべき文法の定着や、語彙を増やすということに加えて、発信型の「書く」に焦点をあてる必要があると言える。「書く」技能を向上させることで、上級レベルの日本語に達すると思うからである。

以下では、特にこの点に関して、学生の作文の例から具体的にその問題点を挙げ、「中級・後」での作文指導について考えてみたい。

2. 「書く」技能に関する問題点（1998年度夏・冬学期の場合）

1998年度に学生に宿題として課した作文は、各学期とも全部で10回。その内容は教師側から、また、学生の希望もまじえて以下のようなものであった。

夏学期の課題

「うその新聞記事」
（『文化中級日本語Ⅱ』第一課作文課題）
自分へのインタビュー（インタビュー形式）
VTR「役に立つ授業」を見ての感想
女性の役割
安楽死
自分の日本語学習法
自国紹介
人種差別
飲酒問題
教師への手紙

冬学期の課題

「うその新聞記事」
（『文化中級日本語Ⅱ』第一課作文課題）
自己紹介（インタビュー形式）
日本人について
日本での体験
日本のテレビ
同棲と婚前交渉
冬休み
日本人の異性について（新聞記事を読み、その内容を討論後、感想を書く）
異文化論（『韓国人の発想』を読んで）
教師への手紙

2-1. 文法、表現等にかかわる誤用

「中級・後」で学ぶ学生たちは、自分の意図することはとりあえず文章にできるレベルではあるが、それでもまだまだ多くの誤りがある。中級後半でありながら、初級レベルの漢字や文法（助詞、活用、時制、態等）の誤りが見られる学生も少なくはない。このようなことは、学期初めのプレースメントによるクラス分けで、もともと一つ下のクラスに入るようにという指示を受けたにもかかわらず、このクラスを望んだ学生によく見られるものである（しかし、そのような学生が発話レベルで常に文法上の誤りを犯すとは限らないので、クラスの配置は難しい問題といえよう）。

既にある程度のまとまった年月日本語を勉強してきてはいても、作文指導を受ける機会があまりなかったのではないかとと思われるような基本的な誤ちを犯す学生も多い。基本とはすなわち、文法、語彙などの外国語である日本語そのものの問題と、自分の意見をまとめたり、起承転結などがはっきりわかるような文を書くという、作文の基本である。

一橋大学で決められた「中級・前」「中級・中」で学ばずに、このクラスに入ることができるレベルならば、この段階で最終的にそれらを完璧に学びとるべきであり、これ以前のクラスで学ぶ機会があるのであれば、やはり作文指導の時間をとるなどして、それらを克服しておくべきだと言える。

以下に、まず学生の作文から誤用を紹介する。

(1) 文法

「一番面白いのは寝ながら、授業に出席する学生もいました。」
「自分が日本へ留学に行けたことを思うと、いつも感謝とラッキーの感じがあふれています」
「しばらく注意深く講演者の言葉を聞きましたけど、突然目を閉じて、寝ついてしまいました」
「『イタリア人がよく寝ている』というイメージがありますけど、それ（どこでも寝てしまう日本人）を見ながら、よく寝ているのは日本人だと思ってしまいました」
「このようなシュミレーションは単純すぎるかもしれないが...」
「留学を充実して、計画をうまく実現するか...」
「せっかく日本に来て、この国の所々をみるはずです」

(2) 作文中に見られる話し言葉

「この間、カンボジアに行ってきたんだけど、アンコールワットで日本人はうろろうろしたのだ」
「私の国はドイツだけど、92年からイギリスで生きている。そのため、ドイツについてイギリス人の観点から話したいのだ」

これらは、会話が流暢なことに比例するかのようになり、特にスピーチの文を書かせた時、ホームステイなどを経験してきた欧米の学生によく見られるものである。これらはただ添削して返却しただけでは、いくら多くの作文課題を与えて何度書かせても同じ間違いを繰り返すことがある。

また、文体の統一がされていないこともあげられる。これらに関しては、作文添削などの他に、練習問題^{*3}を与えるなどして、学生に注意を与えている。

(3) 語彙、表現など

「英語を教えてすぐお金持ちになるのが夢です」
「基礎的な科目を選ばなければ、基礎学力が低下してしまう可能性がある」
「私の国はドイツだけど、92年からイギリスで生きている」
「先輩からいろいろな助けを受けて、さびしい感じが出てくる私はだんだん慣れてきます。指導教官や先輩は熱心でやさしい人達で、私に親切に扱います」
「しばらく注意深く講演者の言葉を聞きましたけど、突然目を閉じて、寝ついてしまいました」
「このようなシュミレーションは単純すぎるかもしれないが、学校と社会との間によい連絡方式と言えよう」
「自分が日本へ留学に行けたことを思うと、いつも感謝とラッキーの感じがあふれています」
「心の中の思いと考えをよく話し合って……」
「よく発展していく日本経済を身につけて、優れた日本文化を体験することは、大切なことですから、これから私もこの道にいくつもりです」
「今年生ですかと聞かれています。ドイツにはその学年の分類がありません」

言葉そのものの使い方がまちがっているものから、母国語からの直訳と思われるものまで、さまざまであるが、直訳的なものは漢字圏の学生に多い。

(4) 主述の関係

「わかってきたのは、日本人は自分の考え方は他にないと思いこんでいるのだ」

*3 『社会科学の道しるべ(分冊A)』(一橋大学留学生センター1998年) 第1章練習問題

「まず考えられるのは、気候が原因かもしれません」
「一番面白いのは寝ながら授業に出席する学生もいました」

中級後半になると、複文、重文を多く用いた作文が書けるようにはなるが、文が長くなるので、主語と述語の関係がずれることがある。

2-2. 文の構成にかかわる問題

「中級・後」のレベルでは、短文では基本的なミスは多くはない。しかし、自分の意見をまとめて書くということになると、内容を伝えることにとらわれて、全体が見えなくなってしまうことがある。

作文課題のいくつかは、それが会話（討論）に用いられるという点からも、事実を伝えるとともに、自分の意見を取り入れなければならない。会話では、相手に理解してもらう場合に、ジェスチャーや絵など様々な要素に助けられるため、日本語が間違っている、また文になっていなくても、とりあえず意見は伝えることができる。作文では、伝えるべき要素を全て文に盛り込む必要があるのだが、それが不足しているため、結局読み手に伝わりにくい文になってしまう。

以下に学生の作文（原文のまま）を挙げる。

(1) 段落分けの問題

「学校や仕事にカンガルウで通う！

99年4月からオーストラリア人が毎月の一日に何としてもカンガルウという運送料を使わなくてははいけません。というのは、オーストラリアでカンガルウの人数が増えてきたし、環境を守るからです。オーストラリアの総理大臣ハワードが昨日の会議でおっしゃったのは「オーストラリア人は環境問題に対していつも関心しています。（中略）再選のためにこの法律を作ったそうです。オーストラリアの国民がこの法律についてアンケートを答えました。（中略）この法律に対して反対論が多いので、これからなくなるはずがあります。」
（課題は「うその記事」）

まとまった文を書くには、段落分けが大切である。「話す」と違って、文に音声としての抑揚がつけられないので、読み手に伝える部分を整理して書くことが必要である。

(2) 内容の膨らみ

「社会における女性の役割

たいていの国と比べると、ドイツは女性と男性のもつ権利は、法の上では、平等である。

しかし実際には、男女平等であるかという点には疑問の余地がある。

イスラム諸国と比較すると、もちろんドイツでは、女性が政治や公的機関で活躍し、自由に仕事や生活できる様式を選ぶことができる。

しかし男性にはもとめられる兵役の義務が女性には、もとめられず、本当の意味での男女平等が達成されているかどうかは疑問である。

かつて公的機関や行政機関での重要な位置で働く女性の割合がドイツで出され、その結果、女性の就業率が低かったため、80年代からは、ある一定の行政、公的機関の参加が女性に求められている。

その後じょじょに、女性が公的機関で働く割合が増えている。

しかし、私立企業では今なお、女性の給料は仕事内容は、男性とまったく平等であるとはいえない状況である。」

内容別に段落を分けており、それぞれがまとまって書かれてはいるが、ひとつの段落に1文ずつしかなく骨組みだけで、肉付けがされてない。確かに事実を述べてはいるが、これらの事実を裏付けるもの、そして最後に本人の意見としてのまとめがほしい。

(3) 文のしめくくり

「私は、オーストラリアの代表的な食事の事について書きたいと思う。すなち、有名なバーベキューである。この有名なオーストラリアの食事は、クイーンズランド州で特に有名である。(中略)

気候のせいで多くの日は室内で食べるにはあまりに暑すぎる。なお仕事で長い一週間で働いたあとで、週末のバーベキューはリラクスのために完璧である。

又、家族や友だちと一緒に楽しむ。(中略)

オーストラリア、特にクイーンズランドでは、このすばらしい気候のおかげで、もっとも多くの平均的な家は外にもてなしの場がある。(中略)

なお、家は別として、クイーンズランドは沢山公園がある。そのほとんどにはバーベキューの設備がある。クイーンズランドでは、これらの設備は容易に使えるのでバーベキューにはとても便利である。例えば、町のそばにあるサウスバンクのパークランドへ言ったらバーベキューの設備があるので、バーベキューを作ることができる。だからいつもこのパークランドは混雑する。」

(2)に比べて肉付けされてはいるが、最後は設備に関する内容だけで、自国文化の紹介であるバーベキュー全体の紹介に、まとめがないまま終わっている。また、その設備に関する説明も、それまで肯定的に紹介されてきた文が、「混雑する」という、やや否定的な言葉で終わっている。それまでの肯定的な紹介文の流れを崩さず、文を終えるようにしたほうが良いだろう。

(4) 中心となる内容を書き表す

「立候補者ウルサイ

国立に住んでいるおばあさんが耳が聞こえなくなった。中国立の山田みゆきは二十日夜ポチという犬と一緒に歩いていた。突然六つの立候補している車が来た。そのために山田さんは急に誰も聞こえなかった。

立候補者は誰と聞いてたら山田さんは「えっ、何」と答えた。」(課題は「うその記事」)

言いたいことを、タイトルだけでなく、最後に文で書いてまとめれば、記事全体もひきしまり、読み手にもっと伝わりやすいものとなるだろう。

3. 今後の作文指導のあり方

3-1. 書く内容を絞る

外国語である日本語で問題なく作文を書くには、学習者の母語における作文能力が大きく関係するとは思いますが、中級の段階から作文全体の構成ということについての指導が必要であるように感じられる。学生たちはこのクラスで半年(正味4カ月)しか学べないだけでなく、日本での滞在が1年という交流学生が多いということも考えると、やはりこの段

階での指導はすべきであると言える。

しかし、筆者もまた、学生の作文指導を念頭においた題の与え方というものを考慮せず、書かせてしまった感は否めないと反省している。昨年度のふた学期でいくつかの作文を課してきたが、何を書かせるかという点に絞らないまま課題を与えてしまったことは、作文指導をするにあたっての初歩的な誤りであった。

学生に課した作文には、新聞記事のように、全くの事実だけを述べるものもあったが、他はそれと異なるものであった。

例えば自国の紹介や日本での体験の場合は、事柄を並べることが必要であっても、最終的には何を伝えたいのか、経験から学んだことは何かなどが書かれれば、作文として膨らみが出てくる。その点に関しては、まだ外国語で書くということに慣れていない学生もあると思われるので、しっかり伝えておかなければならないと実感した。

授業で読んだ新聞記事の内容について、感想を書かせるなら、ただ感想を述べるだけではなく、その根拠を示すようにと指示をあらかじめ出すことは必要であったと思う。これにはやはりそれらを説明できる作文例を見せ、その構成を学ばせるべきであった。

また、「日本のテレビ」のようなものは（これは学生から提案されたものだったが）、テレビのどのような点について書いていくかということに絞って書かせるべきであったと思う。このようなものは、何かよりどころとなる記事なり討論なりがあって、初めて書けるものであるので、このような作文をいきなり課すことは無理があった。

中級の段階では、いきなり作文を書けというやり方は危険である。個人個人の経験に基づくような場合であればなおさら、それをどのように書いていくかという指導が必要である。つまり、書きたいことは何か、書かなければならないことは何かということを指摘していくべきであろう。

3-2. 個別指導をする

2-2 であげたこれらの作文は、ただ添削し返却しただけであった。しかしそれでは不十分なので、返却後、段落分けなどを指導しつつ、提出されたものを個々に指導する時間を設け、再提出させるという作業を数回行うべきであると感じた。

多くを書かせるだけではなく、どこが問題かを直接学生に指導する時間をとることで、学生自身も自分の作文の問題点がより見えるであろう。文法、語彙、段落分け等に限らず、文の構成について学生がより深く理解できると思う。また書き手と話し合うことで、添削する教師もより適切なアドバイスができるだろう。

1999年度の夏学期に、短時間であったが実際に個別指導をを行ってみたところ、その後の作文に多少の変化が見られた学生もいた。今後はこのような時間を増やしたいと考えている。

上級クラスにふさわしいレベルの学生を送り出すために、作文指導を再検討し、重点を

置いていきたいと思っている。しかし、このクラスが求められている、他の技能を伸ばすという目標達成も同時に考えた場合、作文指導は段階別クラスのひとつである「中級・後」だけでは、時間的な制約から不可能に近い。作文にはある程度の指導期間が必要であるので、日本語選択科目「文章表現」などのクラスをとることによって効果が上がっていくことと思う。

【参考文献】

倉八順子(1997)『日本語の表現技術(読解と作文)上級』古今書院

杉田くに子(1994)「日本語母語話者と日本語学習者の文章構造の特徴—文配列課題に現れた話題の展開」

『日本語教育』84号

西谷まり(1994)「ミニ・ディベートと作文の合体授業の試み」『国際学会日本語学校紀要』

羽田野洋子・倉八順子(1995)『日本語の表現技術(読解と作文)中級』古今書院

松岡 弘(1994)「日本語教育における論理的文章の組み立て方」の指導」『一橋論叢』第111巻3号

一橋大学

----- (1995a)「文学的文章をモデルにした文章の論理的構成の指導について」『阪田雪子先生古稀記念論文集 日本語と日本語教育』三省堂

----- (1995b)「論述文における論型の指導について」『言語文化』33号 一橋大学語学研究室

『一橋大学留学生センター紀要』正誤表（第2号）

確認 55 頁が重複している

誤 82 頁 鶴田庸子 論文 「University of London」

正 82 頁 鶴田庸子 論文 「University of Luton」

執筆者各位にご迷惑をお掛けしましたこと、深くお詫びし、訂正いたします。

（『一橋大学留学生センター紀要』編集委員会）